

## 巻頭言

### 新年のご挨拶 —あなたはどの問題から取り組みますか—

和田 隆博

龍谷大学 理工学部 教授  
連絡先 twada@rins.ryukoku.ac.jp



みなさん、明けましておめでとうございます。

先般、応用物理学会会長で大阪大学教授の河田聡先生が先のインタビュー[1]で述べられた、東京大学名誉教授山崎弘郎先生が日経産業新聞の「Techno Online」[2]に書かれた、「入学試験を受けるときに、どのような問題から取りかかるか」というコラムについてご紹介してみたいと思います。

入学試験では問題の回答に制限時間が設けられているため、受験テクニックとしては、「解ける問題」から取り組むこととなります。解ける問題は一般にやさしい問題です。こうしないと、一問も解答できずに時間切れになってしまい、運が悪いとその科目は零点になり、目的とする学校に入学できません。つまり、受験で重要なのは短い時間で解けるやさしい問題を見つける能力です。

そのようにして受験社会を突破してきた人たちは、社会に出て企業に就職し、やがて組織を支える研究者や技術者になっても、本人は全く意識しないうちに、受験の時と同じようにやさしい問題から取り組みます。私の経験した20年以上も前の話ですが、自身で設定した目標を達成したか否かにより、賞与・昇給額を決定するという人事評価制度が導入されたことがありました。こんな時に表れるのが学生時代に身につけた「解ける問題」を見つける志向です。人によっては、どうしてもよいやさしい課題を設定して、それを達成して自己満足し、上司にそれを成果として認めてもらおうとします。もし、本人が重要な問題が他に存在することに気がついていても、チョット取り組んで答えが見つからなかった場合には、その問題はひとまず、先送りします。しかし、現実社会の中ではこれでは問題です。

皆さんは、経済や品質管理の分野で言われているパレートの法則というのをご存知でしょうか。全体の大部分は、全体を構成するうちの一部の要素が生み出しているという理論で、80:20の法則とも言われている理論です。ビジネスにおいては、売上の8割は全顧客の2割が生み出している、品質管理においては、故障の8割は全部品のうち2割に原因がある、という経験則です。

たとえば、入学試験で5つの問が出題されたとします。普通の入学試験では、1問20点でどの問題を解いても20点もらえます。しかし、パレートの法則が成り立つ現実社会では、5問のうち1題が80点で、残りの4題をすべて正しく回答しても20点にしかありません。どれが80点の問題かわからないのも普通です。しかし、現実社会では、この80点の重要な問題を見つけるという課題発見能力が最初に必要なステップであり、次にそれに正しく解答する能力が求められます。「問題を解決することよりも、問題を見いだすこと、したがって問題を提起することの方が肝心なのである」と、アンリ・ベンクソンも言っています[3]。これは、解決すべき問題を提起できれば、優秀なスタッフに解決を任せることができる立場にある、経営者やリーダーに求められる能力と思われまます。

今回このことを紹介したのは、私も含めて高校・大学と受験を経験してきたほとんどの人たちが、程度の差こそありますが、この問題の先送り体質を持っていると思うからです。そして、そのことを自分自身で認識する必要があると感じるからです。孫子の言葉で「彼を知り己を知れば百戦殆うからず」があります。自分自身の考えの傾向を認識することで大きな間違いを避けることができるとおもいます。

ニューセラミックス懇話会では、今年も会員みなさまの「重要な課題の発見」や「その問題の解決」のヒントを提供することを目指して活動したいと思っています。今年も宜しくお願いします。

[1] 河田聡：「会長インタビュー 応用物理学会は先送りしない」, 応用物理 第85巻 第1号 pp.2-5 (2016).

[2] 山崎引郎：「問題の先送り体質—受験勉強が原因？」日経産業新聞 (2015年5月8日)

[3] 鷺田清一：「折々のことば 292」 朝日新聞 (2016年1月26日)